

第343回 芹沢光治良文学愛好会

「幸福の鏡」

今回は、司会のため簡潔に書きます。

神と人間シリーズ 13000円 +アルファで幾つかの作品が入ります。

5月の刊行を目指している。

解釈と鑑賞でコマーシャルが入る。

文庫本はまだ営業的に難しい。文庫本の方が難しい。

解釈と鑑賞も例会で販売します。来月申し込みを受け付けます。

三月の例会は三月一八日（土）に変更します。

A：読んでしばらくたって二回目がよくわからない。「真珠」高貴の壺 始まりに出てくる。石田家に出てくる。この関係が重く、三つの家が入り交じっている。トミ子さんのお兄さんと田中春子は志賀家のお兄さん、トミさんは随分自分勝手だなあと思った。馬車馬のようにさせたの。大臣の娘さんは、内務大臣をやっていた内容は今の政治家に聞かせたいと思いました。

B：第一感想はまとまりがつかない。P313女性が生きていくというこの時代に品位の違いがあるなあとと思いました。職業をしていくにはそれなりの精神力がいる。理想とか自分自身がどうするか品位というものがある。胸を突かれるように高貴な方、その後初対面の時感度する。穏やかで貴賓があると感じました。私は、ある方を後ろ姿を拝見させてNさん、職業を続ける、家庭に入って穏やかな生活を送ろうと思いました。

C：すーと読んできただけで。直子が小川との結婚を避けようとするのはなぜか。どうしてそんなに避けるのか？結婚を避けようとしているのか。幸福の鏡はすーと読んでただけで一六、七年前角田房子 民美暗殺 韓国を知らないなあとと思った。日清戦争が始まった朝鮮。みんな歴史に残ってる王女様。向こうの方々には、誰にも知っているお話。しょうとくきゅうなどもっと印象が違くと残念に思った。うらみを忘れられない。朝鮮王朝の末期の聡明で立派な人。お后にこの時に王は動かされ、力一杯持った人でした。韓国に行って家族の人に接したばかり、芹沢文学を受け入れてくれる韓国の人にはありがたいと思いました。日本人が殺害したとっていた。

小島耀子さん

D：女性の生き方 ルイズ夫人 教授が出征する。日本人の妻としてどうやって守っていくか、女性の心がまえを教えているのではないか。ルイズ夫人が心を許せる人は実際に肌を触れることが通じ合う。山脇は愛人と別れて化粧品を作る。戦争に行く覚悟で

女性文化を作ろうとした。昭和一三年女性文化はどうか

E：幸福の鏡に出てくる、トミ子の行動を不信感を持つ。八方美人だと思う。そうかと思うと直子の姉の夫の藤田が帰ってくると、嬉しくなったり、手当たり次第あせるか、玉の輿に乗るようにな気がする。不信感を持ったが、この場面においてはトミ子の場合の不信感をもった。P 3 4 2 自分が卑怯者になってしょうがないと直子自身が正直伝えてなかった。言うべき事は、みんな言うてしまうのではないか。

F：むなかたさんは正直に言っている。世間的には良くないのに被害者になったのではないか。

運命が変化するのが多かった。令嬢のように今まで暮らしたけど、直子の変化が多かった。遺言のように結婚を迫っているのに結婚をしない。結婚を断ってまでの情熱を持っていない。フサは教養はないけど経験を積んで技術を積んでいる。なおこの場合は、頭だけで考えている女子学生。姉は、実質的に現実を見て動いている。トミ子だったら銀行の交渉など向いているのではないか。杉方先生が出征すると周りが変わる。以前にどんな関係でもそれまではどんな時代だったか。出世を拒んだら反対したりどんな目にあったか。

G：いわなくてはいけない。出世する軍人

H：いろいろある。今の話題から、文学館で出た時、10年ぶり326ページまで読んだ段階。出世の件から、芹沢さん 水島春雄さんが、出版社が立ち上げた時の作品がこれ。後に、水島さんがでっち上げ事件で近況報告したのですが、某政治家に連絡をかけた。ブルジョアの時からつきあっている。あまり良い区品だと思っていない。出世の件で、イメージでは昭和一三年少し時期が早いのではないか。学生と教師が手を付けた噂で辞めざるを得なかった。自分らのところから離れて、出征で良かった、良かったとなる。一回、岸田今日子の父、国男さんと同じ立場。止めたら、おうしゅうしなくてはいけない。その前後が小説化される。書き下ろしに近い作品。書いてから速かった。こなれてない。文学賞では一次で落ちてしまう。一つの文で誰が主語か、句点、読点で分けた時に三人ぐらい続いている。それが、事情があって書き飛ばした作品ではないか。

女性文化では、熱月 やまざきゆみこ 宮田ふみこ たけばやしそうあん
富んでる女 芹沢さんにあった人、パリ夫人のモデルがみやたふみこだと思う。トミ子が大きくなったら、こんな人。資生堂のチーフマネージャー。活躍だけでなく話題になった人。宇野千代、スタイル きたはらたけおを紐にした。結構特殊な分野でいた。昭和一五、六年前わりといた。お店を経営したり、美容院 吉川淳之介のおばあさんなど、美容院を経営している方がいた。昭和二桁初期にはいたきがする。マスコミが揶揄強いていた感じがする。不自然な気がしない。

〇〇に会って、ケンカした。こいつは、塀の中に落としてやる。怪しい会社なので今更、どうのこうのはおかしい。××が、きた。決して云々では、ない。こういう事があって、メディアの問題。司馬遼太郎の隠し子の話は止めている。売れている作家

は、何もやっている。

戦前もあった。

H：いかにも小説を読んでいる。あらすじを追っていて、三人はどうなるか。浅はかな読み方をしている。この時代にこれぐらいのことを考えている女性はどれぐらいいたのかなあ。スタンダードに近いのは春子さん。トミ子は調子よくやっている反面、哀れさを感じる。直子さんはバックを持ちながら、その重さに耐えるのはたいへんなのだろうか。家という重みを感じさせる。この小説では、大切なのであろうか。家をうまく使い分けている。小説の場合に耐えるのではないか。家が個人として出てくる。

I：中だるみな感じで読ませてもらった。感想を述べるのは辛いものがある。送る側、送れる側の違い。ルイズ夫人の日本になりきって。学校側の態度。出世とすると名誉であると思っている。変わり方は、良く書かれている。父親の立場と政治家の立場の違いを良く書いている。病に伏している間でも宮城に対しての思い。宮城に対して拝むというのは、挨拶は時代さを感じる。三人歩直子の進路はどういう方向に進んでいるのか、次回三人の進路はどうなるか。後ろ盾がないかあるかで行動に現れるのでは。女性の生き方にひさの身の振り方もしょうてん。すごいケンカでした。

J：先月お休みでスポーツがおもしろい。読むことはおもしろい。大正の生まれで、この時期を知っている。時代の流れなどある意味での実感と共に読ませていただいて。そういうような事があったのだ。改めて教えられることがあった。中外しょうこうしんぼうは、どうだったのか。若い人へのメッセージ。それも今からの感覚からいったら違う。

映画にもなった。直子に春子にトミ子。女子大に行けた人はエリート。この当時の恵まれた環境にあるのではないか。直子さんが婚約者のことを父に言えなかった。杉方先生を愛しているのかなあ。これも終戦に至る形に読んでいる。小説ではなくて足りないものだと思う。無言の弾圧。日本女子大は楽なおうち。東京女子大、高等女子師範、国文科三年間、家庭家、国文科

K：この時代の若井生き方。後書きで先生が書いてある。直子の気持ちの揺れ。握れなかった。直子がいつはっきりと杉方先生が好きかと認識したのはいつか？先生の直子と杉方先生の言葉の描写では感情が出ている。直子が好きだから手を握らなかったというのはまだ誤っている。良いわけは、しどろもどろ。昭和一三年、一四年杉方先生がおうしゅうさえてたいせいの中に入る。大和撫子よりよけい立派。こんな素直に立派に過ごしている。二二六事件がある。たてつくような文章を書くと、映画は昭和一六年、戦争に対して協力している。

L：戦争讚美P 3 3 4 ローマ法王が聖戦ピオー二世 ローマ法王是認するようなことをいっている。ナチスをかくまったという人物である。腹黒い人物だとは、思えた。友好だから、

M : 去年一年間全然出てこれなかった。去年暮れに「原点は芹沢先生」先生に会いに行かなければいけないと新年会でも、六月二五日シアターアップルで本番。二週間は読めない。電車の中で立って読んできた。こんなに沢山読めるかよーと思った。すばらしいと感動した。直子さんの意志の強さは、女性のこの人と結婚できるのかできないか本物の感性を男性である芹沢先生が良く書けているのではないか。女性の気持ちをうまくキャッチしている。ルイズと杉方を信じ合っているけど、直子さんとの関係。俳優は、映画に対しても興味がある。

N : 幸福の鏡を好きかどうか違和感を持っている方もいるのではないか。三人の性格を会話形式で読者に伝えているか、良くできている。作者がふと出て納得できない。作者の言葉が出てくる。二人称や三人称が出てくる。三人の性格を出ているのはおもしろい。トミ子をどういう風に位置づけるか。断末的なことになるのではないか。新聞で連載されたから。毎回山を作る。

O : これない状態でした。ざーと今日までの

P : 春雪を過ぎて。おもしろいと思った。一気に読むほうが面白い。この作品は過去になかったので、文学館に入れてもらって良かったと思った。通俗的なところもある。矛盾点は、重箱を探っているのではないか。モデルがいたかどうかわかりませんが緻密さに驚いた。病気、宗教などがあんまり感じられない。先生の名作に入れていってもよろしいのではないかと思った。脚本を書く面白いのではないか。民芸文学座でやればおもしろい。嫌悪感を持っていた。春子に人間性の興味を持つ。アマチュアで一九才からこの年になっているか自分の生き方に対してどうしていくか、トミ子はすごい、追体験、自分でもどう思っているか、どう生き方をしていくか、と表現する。印象あるので会話チックは心理描写を踏み込んでドストエフスキーの影響、モーパッサン、バルザック戦争に入る前の警鐘を鳴らさなくてはいけない。あからさまにその方向に行くのに人生を考えるのでは。余談ですが、五年間来なかった。伊沢のおじさん、法じ、二、三ヶ月わかる内に合わせるかどうか、人が亡くなるとは悲しいこと。芹沢先生から大きなものを学ばせてもらった。読書会をやって、

Q :

R : せきが出る。本を読んでない。一週間前からハン先生から電話。韓国人で在勤した人で、一二巻韓国語に訳して持ち込んだ。持ってきてくれた人が、韓国語に訳されたのを見て、作品にホレテしまって、次に訳されればよかった。はんさんはヨーロッパに演奏旅行に行っている。訳したのを見てその人の思いを実現させたい。惚れ込むだけの理解力だけでも何とかしたい。韓国語に直すのはすごいと思った。沼津の読書会に行った。そこに一五才のお嬢さんがいる。人間の運命の豪華本をもって来る。沼津の渡しにのって芹沢先生の事を聞いた。文学館に行った。親に頼ん

で本を買ってもらった。その子が言うには、手に入りやすい本が必要だと思った。早稲田実業中学校に国分寺に新日鐵の寮がある。松岡さんの小倉哲也が寄付した星の王子様で国文学で芹沢光治良保証人になった。別の先生が、お舅さんがその本を持っていて神シリーズの本を買った。

狭き門・・・希望を働くというのが難しい。

狭き門画家の幽霊がでて作者に

狭き門の内容をみるとルイズ夫人の態度、日本人の新しい発見

訓育・・・海軍用語 レクチャーを受ける。しつけ。

体育、知育、徳育

新聞小説 タイトルは適当につけられる。タイトルや文章は大雑把に付けている。

去年の10月、ブログで芹沢光治良と岡玲子

残っているスーダン内戦

神の三部作 スーダン内戦の事が書かれている。

S：田村さん、片山さん昭和の戦争の前、人生の先輩、地方の互助会、三人の多感な時期の女の子達、おっとりしている感じがしている。兵隊に行くのを見て、いかがだったのですか。

T：母親を14才に無くしている。父と兄と三人の生活。父と私だけの家庭で育った。先生のこういうのを読みますと、こういう幸福の鏡を振り返って、見ると空襲が始まるころまでは危機感をなくて過ごしていた。空襲が始まって、実感をする。何も教えられていなかった。一般市民としては何もわからなかった。ラジオだけですか。一般の市民では何も知らされなかった。あまり感じることなく。日本人だと苦労させられた。日本の国民だって。昭和18年の学徒出陣で帰ってきた。MPで刀を取られた軍刀を取りに来たのが2世 終戦米沢 井上ひさし 9月頃 秋に来た。

U：この三人の女子大生がいて今の時代に手紙は書かないは、親が反対しない プラトニックラブというのが存在した。トミ子の生活が腹が立つ。

アグレッシブに必要なこと。

春子はノーマル。

昭和13年 ルイズ夫人

聖戦と思えるところがある。

日本女性だけの所にルイズ

働く・・・

海よ

文芸記者が適当

人間の運命 佐倉信夫さんが話す どういう題にしたらいいか 読んでいって幾つか

持ってきて選んだ。作家によって違う。作品そのものを大切にして、題は任せる。芹沢光治良は作品重視。

思いついたのは、いつもまにか作家になっている。手法とか文体の問題。幾つかの6割ぐらいはタイトル

P 4 9 2

タイトルはあてはまらないかもしれない。父と子は、人間の運命に書き直していた。途中まで、父と子が消えてしまっていた。

司会をしながらの記録でした。中途半端で申し訳ありません。